

**第3回鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会
議事要旨**

■開催日時、場所

開催日時：2024年12月20日（金）09:30～11:15

開催場所：京都経済センター 3-F会議室

■議事次第

1. 開会
2. 挨拶
3. 出席者紹介
4. 議事
 - ①鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組状況について
 - ②今後の進め方について
5. 閉会

■出席者（敬称略）

（委員）

- 鎌田 磨人（徳島大学 教授）◆会長
坂本 昇（伊丹市昆虫館 館長）
中村 圭吾（国立研究開発法人 土木研究所 流域水環境研究グループ長）
丹羽 英之（京都先端科学大学 教授）
深町 加津枝（京都大学 准教授）◆副会長
八木 剛（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）※Web参加
田中 伸弥（※代理：京都市 建設局土木技術・防災減災・公園利活用担当局長）
奥野 真章（※代理：京都府 建設交通部理事）
今井 幸彦（※代理：農林水産省 近畿農政局 農村振興部 地方参事官（特命・事業計画））
後藤 孝行（※代理：国土交通省 近畿運輸局 観光部次長）
徳丸 久衛（※代理：環境省 近畿地方環境事務所 生物多様性保全企画官）
小口 陽介（環境省 自然環境局 京都御苑管理事務所長）※Web参加
伊藤 昌資（国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所 副所長）
秦 英正（株式会社京都銀行 執行役員 兼 公務・地域連携部 部長）
田中 伸尚（京都信用金庫 総合企画部 課長）
関本 陽一（京都中央信用金庫 執行役員 兼 地域創生部 部長）

（オブザーバー）

- 谷 優子（きょうと生物多様性センター）
國島 優希（きょうと生物多様性センター）

(事務局)

国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所
公益財団法人日本生態系協会

■配布資料

議事次第

出席者名簿

配席表

鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会 規約

資料1：鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組状況

資料2：今後の進め方

参考資料1 第2回鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会 議事要旨

参考資料2 鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク全体構想

参考資料3 きょうと生物多様性センター リーフレット

参考資料4 きょうと生物多様性センター ニュースレター1号

【議事内容】

■淀川河川事務所 挨拶

・伊藤副所長より挨拶。

■きょうと生物多様性センターの紹介

・きょうと生物多様性センターよりセンターの概要の紹介。

会 長 本日の会議はオブザーバーでの参加であるが、きょうと生物多様性センターには委員としての参加も検討いただきたい。

オブザーバー センター内部で検討したい。

会 長 本日、委員にご承認いただければ、次のワーキング等から参加いただけるようにしたいが、いかがか。

(異議なし)

■議事①：鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組状況について

・事務局より資料1について説明。

委 員 京の虫の音レコーディングが公園を中心に実施された。今後の展開として、公園を核に鳴く虫の生息環境のネットワークをつくり、情報を発信していきるとよい。公園以外に、嵐山のような生物多様性のホットスポットとも連携しながら、様々な人に利活用してもらうような仕組みにつなげられるとよい。

企業の方々もうまく関わることによって、生物多様性への貢献やTNFD等での社会貢献につながり、京都らしい好事例となる。

委員 京都市には958箇所の公園がある。生物多様性は人の住みやすさの指標にもつながるものであるため、公園で鳴く虫に関する取組を実施する際は、場所の提供や昆虫の確認・採取の際の手続き等に関して、柔軟に対応できればと思う。普段から国や京都府と連携しており、今後も連携を図っていきたい。

会長 桂川の渡月橋周辺などを拠点に、どのように鳴く虫の生息環境づくりの取組を広げていくかを地図上に示して、公園等と連携していくことができるとよい。地域・人づくりの取組のガイドツアーについては、アンケート結果をもとに、ツアープログラムを練り上げていくことが大切である。ガイドの育成やガイドツアーを運営するプラットフォームの作成が次の課題である。

委員 市民参加型の取組である京の虫の音レコーディングでは、録音された内容がウェブサイトに掲載され、鳴く虫がどこに生息しているかが面的にわかるので面白い。公園は誰でも行きやすい場所であり、その公園でさらに情報が蓄積されて、多種類の虫の音を楽しめる公園とわかれば、虫のスポットとして紹介できる。また、公園の映像等も掲載することができれば、現地に行かずとも、情景や風情を感じることができ、実際に行こうと思えば、現地で虫の音を聴く流れがつくれると面白いのではないか。ガイドツアーは、様々な対象者が想定されるが、どのような解説・体験に重きを置くと、さらに多くの方が満足できるツアープログラムになるかを考えていくことが必要である。

委員 市民参加型の取組は、公園以外の身近な緑地にも対象を広げ、参加者も増やしていけるとよい。また、公園や既存の緑地で生息環境づくりの取組を広げていくうえで、関係者の理解を得るために、市民参加型の取組を通じて得られたデータから作成された鳴く虫の分布図は公開されるとよい。

■議事②：今後の進め方について

・事務局より資料2について説明。

会長 来年度・再来年度の試行期間を経てのテイクオフ（発展期）の形が少し曖昧である。プラットフォームは国土交通省が維持してくれると思うが、試行段階でどこを目指すのかを明確にした方がよい。各ワーキングで、将来的な役割分担も含めて考えられるとよい。

委員 2024年5月に提言「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方」が出された。提言では、流域の生態系ネットワークに、公だけでなく民間企業とも連携して取り

組むことが記載されている。また、グリーンインフラの取組も進んできて、公園部局でも注目されてきている。鳴く虫を指標種・シンボルとした生態系ネットワーク形成の取組を、企業や公園部局の方々に知っていただくことが重要であるとする。

会 長 グリーンインフラ官民連携プラットフォームで、鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組を、ぜひ情報発信いただきたい。

委 員 現在、京都市の緑の基本計画の改訂が進められている。鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組は、生物多様性や文化多様性の取組事例になり得る。緑の基本計画の中でも取組を位置付けられるとよい。

委 員 生物多様性の視点を持ちながら、京都市の緑の基本計画の改訂を進めたい。

委 員 金融機関として、取引先の民間事業者からは生物多様性の取組にどのように関わるとよいかわからないという話をよく聞く。この取組を一つの機会にしながら、連携できることを考えていきたい。

委 員 金融機関として、取組に連携できる企業や個人を探していくことは可能と思う。

委 員 金融機関として、京の虫の音レコーディングやガイドツアー等の取組を、取引先である法人や個人へ周知していくことはできると思う。

会 長 民間事業者を対象として、鳴く虫の生息環境の保全・再生の手引書を使った講習会等を実施していくことも考えられる。

オブザーバー きょうと生物多様性センターにも民間事業者から生物多様性に配慮した事業の取り組み方について、どのように取り組んだらよいのかわからないという声が届く。緑地を保有している企業もその価値を見出せていない。鳴く虫は、企業緑地の価値の指標の一つになり得ると考える。

会 長 各ワーキングで、企業との連携についても考えられるとよい。

委 員 鳴く虫の分布情報をもとに、ギャップのある場所を埋める形でネットワークを形成していけるとよい。そのエリア内で、取組への協力が得られる公園や民間の緑地を探すことが考えられる。

委 員 人々が身近な場所に虫がいることに気づいて、楽しむ人が増えて、文化として、次の世代に受け継がれていくことが重要である。お花見や散歩のような

形で、虫の音を聴く文化が続いていくための仕掛けが必要である。

委員 今後、嵐山の地域の方々や企業の方々とどのような取組ができそうかを意見交換できる機会があるとよい。

会長 ワーキング主催のワークショップのような形式で、意見交換をできるとよい。

委員 来年度から「地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律」が施行され、法に基づき、自然を創出・維持する活動を認定する制度が始まる。市民や企業が、鳴く虫の生息場所を管理・創出する計画をつくって実施する場合に、認定を受けてもらい、OECMに登録するという流れをつくっていければよい。また、鳴く虫の声によって季節を感じることもできる文化を取り戻していくことが必要である。

委員 京都御苑でも、様々な自然観察会等を行っている。今後も連携を図りながら、鳴く虫に係る取組を進めていきたい。

委員 今後、外国人旅行者のガイドツアーについて検討するとの説明があった。外国人旅行者は、鳴く虫に対しての感じ方が日本人と異なる可能性がある。それに応じて、ガイドツアーで解説する内容も変わってくることを考えられる。ガイドツアーでは、虫の鳴いている場所に入っていないなど、ルールやマナーについても伝えることが必要である。

委員 京都市内の土地改良区が、多面的機能支払交付金を活用し、資源向上活動として、生態系保全や景観保全の活動を行っている。今後の取組の展開にあたって、土地改良区に取組を紹介し、広げていくことも考えられる。

委員 昆虫に対して嫌悪感を持つ人も多い。鳴く虫を含めた様々な生きものがくらす環境がすばらしいという意識の醸成を進めていくことが必要である。

以上